

第76回 企業活性化研究分科会・議事録

< 第七六回 2015年3月7日(土) 時間: 13:30~17:00 於: 専修大学(神田校舎) >

参加者: 井端、大野、木村、高市、夏目、宮川、山本、渡邊(8名)

1. テーマ: 企業再生の研究—株式会社雑貨屋ブルドッグの場合—

- ・報告者: 高市幸男
- ・配付資料: 23枚
- ・報告内容の要旨

本報告は、株式会社雑貨屋ブルドッグ(以下、ブルドッグとする)が粉飾を行った経緯と現状の業績改善状況から定性的要因を考慮して企業再生の見込みについて検討している。ブルドッグの業績は2007年を契機に年々低下し2014年度は過去最低となった。当座比率は、2011年度の206%から2013年度には98.9%に低下した。しかし、現金預金は月間売上原価の4.8倍、仕入債務の21倍、キャッシュ・コンバージョン・サイクルは2.8であることから、当面の資金繰りには問題ないと推測した。

ブルドッグは多品種の商品を持ち、店舗、倉庫において一定数量の在庫を保持する経営方針である。仕入業務は本社の一括管理、本社から各地域300店超の店舗へ配送するシステムであった。それゆえ、雑貨小売の業容のため多種の品揃え、大量仕入による在庫管理の不備、原価管理が出来ていない問題について議論した。加えて本社社員による商品仕入では地域性、店舗の状況などを把握が不十分で、商品の陳腐化によって売上の減少に繋がることを議論した。また、数万点の実際販売価格の把握、値引き販売の横行で売価把握がとても困難であったと推測した。そのため管理が行き届かない点を利用して粉飾が起りやすい環境であったと議論した。以上により、当面の業容に関しては資金繰りに問題は無いものの、経営管理上の側面を整えなければ、業績を回復できず、財務内容の低下が予測されると考察した。

2. テーマ: 相関係数による売上債権回収状況の調査と事例分析

- ・報告者: 井端和男
- ・配付資料: 14枚
- ・報告内容の要旨

本報告は、相関係数を用いた売上債権の回収状況管理法を事例から実証分析した。本管理法では、回帰推定式により売上債権の各期末における正常値を推定し、実際残高との誤差を算出している。相関係数分析では、相関係数の計算期間が短期間であること、一部の異常値による影響を受けるため、ばらつきが大きくなると考えられる。また、長期間データの場合は、過去の異常値の影響や、企業の構造変化による影響を受ける可能性があるとして指摘した。したがって、本事例分析では、利用可能な全期間と併せて、8ヶ月間のデータによる計算を併用して分析した。

売上債権残高の推定では、回帰推定値は回転期間による推定値よりも精度が高いと考えられる。しかし、回帰推定法では、滞留残高が過大に推定される傾向があるため、売上低迷期には売上債権残高が過大推定になり、売上好調期には過小推定になると分析した。また、回帰推定式の決定係数が低い場合、誤差の相関係数が著しく高くなる結果が出たことから、このような場合には統計的評価手法が利用できないと指摘した。長期滞留が発生した場合の分析結果では、滞留額の大きさに応じて相関係数が大きくなったため、本管理法が売上債権残高の推定に利用可能であると考察した。

3. 今後の予定について

- ・4月11日 分析企業—株式会社クリーク・アンド・リバー— 杉本先生
- ・5月9日 分析企業—日本風力開発株式会社— 渡邊先生
- ・6月20日、7月4日、8月1日 分析企業—未定—

(文責: 夏目拓哉)